

High School Human Rights

ヒューマン ライツ



(高校人権教育通信 第5号) 平成25年(2013年)6月21日

発行 長野県教育委員会教学指導課心の支援室

発行人 永原 経明

1 はじめに

今年度は右の高校人権教育研究委員の協力を得ながら、昨年度に引き続き、高校人権教育通信リニューアル版「High School Human Rights」を発行します。

人間の尊厳や命の大切さを自覚することや、自分の生き方を考えることなどから人権感覚を高める中で、互いに人権を尊重し合う「共に生きる心」を育てていくことは、今年度入学生から全面実施されている新学習指導要領で重視している「生きる力」を育てていくための基盤にもなります。

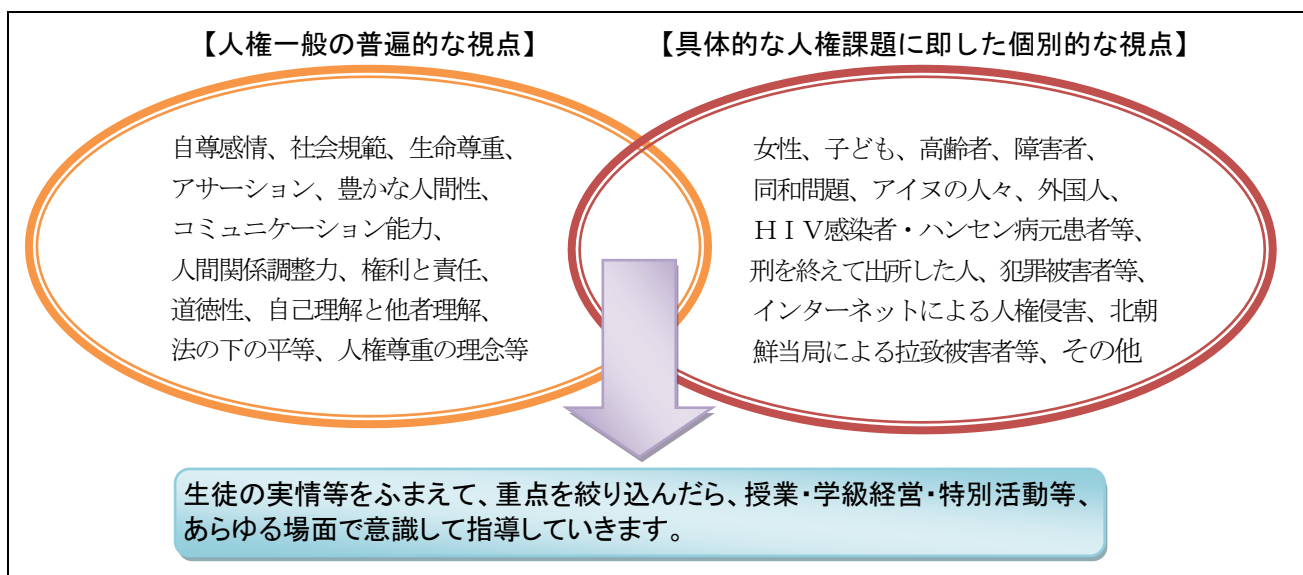
そこで本通信では、この「共に生きる心」の醸成につなげていくための取組について、教科指導における「死への考察から生命の尊厳を考える」実践例を紹介しながら考えてみたいと思います。

平成25年度高校人権教育研究委員(敬称略)

屋代高校	教諭	林 英喜
木曽青峰高校	教諭	平林 洋一
望月高校	教諭	綿内真由美
明科高校	教諭	五明 和敏
穂高商業高校	教諭	田中 聖子

2 人権教育の理念を、日々の教育活動のベースに!

人権教育はすべての教育の基本、という理念を学校における教育活動のベースとして位置づけ、各教科や特別活動等、教育活動全体を通じて推進することが大切です。具体的な取組としては、人権尊重についての理解を深めていくため、「普遍的な視点」と「個別的な視点」の両面から計画的にアプローチしていく必要があります。(参考:「人権教育推進プラン」長野県教育委員会 平成23年3月)



3 「生命尊重」の実践例

「人権一般の普遍的な視点」の中に「生命尊重」があります。人権共存の考え方である「共に生きる心」を育む観点からもとても重要な視点です。すでに取り組みされている「性教育」や「交通安全教育」などはこの視点からのアプローチと捉えることができます。では、教科指導における人権教育として「命の大切さ」、「命の尊厳」をどのように教えたらいいのでしょうか。ひとつのアプローチの仕方として、次の実践例を紹介します。

《具体的な実践例》

高校2年生の世界史Bで、「死から生を考える」をテーマにした実践例。「死」を考えさせることから「生を考える」機会をつくり、今後の「自他の命の大切さを感じ取る」学習機会につなげていく。(ここでは、すでに学習したエジプトやインド等の古代思想における死生観に触れた上で展開した。)

「死」というたいへんデリケートなテーマについて扱うので、生徒の実態をしっかりと把握するとともに、教職員間の情報共有を十分に行った上で実践する配慮が必要です。

- 1 本時では、「死から生を考える」授業を行うことを生徒に伝える。
(「デリケートな問題なので嫌なら書いたり考えたりしなくてもよい」ことを付け加えておく。)
- 2 プリントを配付し、次の質問に対する自分の考えを書かせる。
《質問1》「人は死んだらどうなるのか」
《質問2》「自分が重い病気にかかって、あと半年(一週間、一日)で死ぬとしたら何をするか」
- 3 5～6人のグループをつくり、グループ内で考えを述べ合い、聞き合う。
(参加に消極的な生徒に寄り添う配慮をする。)
- 4 グループごとに話の概要を発表し、全体で共有する。
- 5 結論はないが、次のような話をしてまとめとする。

《質問2》について、いろいろな考えが出されました。しかし、「人生の最後に何をしたいか」は「自分の人生の何に価値をおくか」ということと同じです。そう考えてみると、「最後は家族と過ごしたい」という人は、人生の価値を家族においている、家族を最も大切にしているということです。他にも、友だち・仕事・学問・趣味などが出ましたが、君たちの人生の価値はどこにあるのでしょうか。これから君たちは、何に価値をおいて自分の人生を築いていくのでしょうか。

- 6 感想を書かせ、提出させる。

生徒の感想(抜粋)

- 「死」について考えたことがなかったので難しかったし、たいへんだった。でも、いい機会になった。
- 家族に人生の価値をおいている人が多いと思った。
- 「死」について考えると、同時に、この先、自分が何に価値をおいて生きていきたいのかなど、「生」についても考えることができてよかった。
- 自分の人生の価値はどういうものなのか、考えてみたいと思った。
- 毎日精一杯生きていきたい。生きたくても生きられない人もいる。自ら命を絶つなんて絶対にしない。

「死」を考えることは「生」を考えることにつながっていきます。実践には十分な準備と配慮が必要ですが、生徒集団の状況によっては、「死」から積極的・主体的な「生」についてアプローチしていく取組も可能ではないでしょうか。生徒の感想から、この実践により、生き方や人生観、命の大切さを自らのこととして考える機会となっていることがわかります。さらに今後、授業の中でも様々な機会を通じて、具体的な人権課題に即した個別的な視点からもアプローチしていく(例えば世界史ならば、「女性」、「子ども」、「アイヌの人々」、「外国人」等を個別的視点として扱える)ことで、自分・家族から社会へと、他者の「命の尊厳」について学びを広げていくことができます。

人権教育の普遍的な視点のひとつである「生命尊重」。生徒たちが、言葉で「命は大切」というだけではなく、一人ひとりが「私が大切」、「あなたが大切」と自他の命の大切さを感じ取り、「共に生きる心」の醸成につながるよう取組をお願いします。

4 平成25年度高校人権教育研修・連絡協議会の開催報告

5月20日(月)、全県の公立及び私立の各校人権教育担当者が一堂に会して開催しました。

全体講演では、須坂高校の鈴木詩郎学校長から、県の人権教育の歴史と現状、高校における人権教育の具体的な推進と担当教員の役割、具体的な人権課題、他県の実践事例等について、わかりやすくまとめられた資料をもとに、丁寧に講義していただきました。

「人権教育は、校内のすべての教育活動を通して実施されるもの」であり、担当教員は各校における「人権コーディネーター」の役割を担ってほしい、また、生徒指導係をはじめ、他の分掌との積極的な連携を図りながら、「命」と「人権」を大切にしたいと話され、多くの参加者の、人権教育担当としての意識の高揚と実践意欲につながるものでした。



～「死」から「生」を考える～
氏名 _____

- 1 人は死んだらどうなるのか

- 2 自分の「死」を考えてみる＝自分の「生」を考えることになる。
《質問》自分が重い病気にかかって、あと半年、(一週間、一日)で確実に死ぬとしたら、その間に何をするか。
あと半年 _____
あと一週間 _____
あと一日 _____
- 3 感想



湿度も気温も高くなってきました。先生方、どうぞご自愛ください。

次号は、8月発行を予定しています。ご感想・ご要望をお寄せください。kokoro@pref.nagano.lg.jp